

## 朝鮮通信使の通航と迎接に関する研究

吉田, 智史

<https://hdl.handle.net/2324/7182268>

---

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 吉田 智史

論 文 名 : 朝鮮通信使の通航と迎接に関する研究

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の課題は、日本近世の外交使節である朝鮮通信使（以下、通信使）の海路における安全確保をめぐる対馬藩と迎接役の役割等を論証するとともに、迎接の負担を具体的に解明することである。

慶長12(1607)年から文化8年(1811)まで全12回の通信使うち、本論文では、正徳元年(1711)から宝暦14年(1764)までの4回を主な分析時期とし、対馬藩と迎接役の萩藩が通信使の通航の安全と迎接において果たした役割をそれぞれ検討する。その上で、通航の安全と迎接に関わる萩藩の諸負担の解明を通して、文化8年の対馬易地聘礼に至った要因を迎接役の立場から考察する。

通信使の特徴の1つは大掛かりな迎接体制である。通信使は、両国関係の維持、徳川将軍の権威に関わる使節であることから、先導・警固役の対馬藩だけではなく、釜山と江戸を結ぶ経路周辺を中心に各地の諸藩を動員する体制がとられた。

これまでの研究により、諸藩の史料に基づいて迎接の実態、地域社会への影響について解明が進んだ一方、対馬藩による先導・警固の体制等については対馬宗家文書を用いた解明が課題である。通信使の安危は、日朝の外交問題に直結する重大事であり、対馬藩や迎接役にとって自藩の存在意義や存続に関わる問題であった。とりわけ、対馬藩は通信使の安全確保に第一義的な責任を有していたため、先導・警固の実態解明は必須である。他方、通航や迎接による領民や財政の負担について、解明の必要性が指摘されながら研究は途上である。領民の動員や経費の詳細な分析に基づく迎接役の人的・財政的な負担の解明は、文化8年の対馬易地聘礼に至る要因を考察する上で不可欠な論点である。

また、鷹と馬は、武家社会において権威の象徴とされているが、通信使の礼物となった鷹と馬については研究の余地がある。鷹と馬の贈呈に関する対朝鮮・対幕府交渉や移送をめぐる対馬藩の役割、および贈呈の手順等の解明は、朝鮮国王と将軍の関係を考える上でも有意義である。

このような通信使研究の課題を解明するため、本論文では、先行研究を扱った序章のほか、第1部で海路の対馬藩の体制、安全対策をめぐる対策と対応を論証し、第2部で鷹と馬の交渉・移送・贈呈の実態および、通信使の通航と迎接をめぐる萩藩の役割を検討する。第3部では、萩藩の領民と経費の負担を分析し、迎接をめぐる対立を検討する。各部各章の具体的な論証内容は次の通りである。

まず、序章において通信使の研究史を3段階に整理し、それぞれの到達点を提示するとともに、先

行研究の課題を明らかにして本論文の論点を提示する。

第1部第1章では、海路の安全確保をめぐる対馬藩の先導・警固の体制を明らかにするために、享保4年（1719）の事例を中心に、船や水夫の動員規模、動員方法を分析する。

同第2章では、通信使の安全確保をめぐる対馬藩による対策と対応について、正徳元年から宝暦14年まで検証する。分析の時期を正徳から宝暦までとしたのは、雨森芳洲の『交隣提醒』との比較および影響を検証するためであり、対馬以東の海路を対象とするためである。対馬藩と通信使の間で度々争論があったことが先行研究で指摘されており、対馬藩が通信使と合意形成を図ったとする仮説を立て、4回の使行を順に検証する。その際、通信使に対する対馬藩の認識についても考察する。

第2部第1章では、朝鮮国王から将軍への礼物である鷹と馬の交渉・移送・贈呈について、正徳元年を事例に検討する。そこで、対馬藩による対幕府・対朝鮮交渉を分析した上で、朝鮮から対馬藩へ鷹と馬の引き渡し、釜山から江戸までの移送をめぐる対馬藩と迎接役の役割等を順に検証する。さらに、江戸において対馬藩から幕府へ鷹と馬を引き渡す手順、引き渡し後の対馬藩の動向を検証し、鷹と馬の贈呈を通じた日朝間の儀礼的行為の意義について考察する。

同第2章では、通信使の迎接をめぐる留守居の役割について、萩藩の公儀人と大坂留守居を素材に再検討する。公儀人は、江戸藩邸に詰め、他藩との応酬・周旋にあたる役職であるが、通信使の迎接では江戸のほか、赤間関（現山口県下関市）と上関（現同熊毛郡上関町）における活動も検討する必要がある。また、大坂留守居の活動もあわせて検討することで、迎接をめぐる萩藩と幕府や他藩との関係を広域的にとらえ、萩藩の迎接における公儀人と大坂留守居の役割を位置付ける。

同第3章では、萩藩による通信使の安全確保、とりわけ郡（宰判）の役割を検討する。従来の研究では、迎接役による通航支援（水先案内、通信使船の曳航、水や薪の補給など通信使一行の通航補助）が注目される傾向にあったが、沿岸の郡や浦の役割を再検討することによって、通信使の安全確保をめぐる迎接役の対策と対応を地域の実態に即して解明する。

第3部第1章では、通信使の通航を支援した萩藩の舸子（水夫）と船の動員の実態を解明する。先行研究では舸子と船の概数は明らかにされているが、宝暦14年の事例を通して、舸子と船の動員地域や動員数、動員の要件や時期、動員の財源などを分析する。

同第2章では、宝暦14年の萩藩の迎接経費を分析する。同年の萩藩の史料には、萩・赤間関・上関・各宰判での支出項目や支出額が詳細に記されているため、それぞれを分析することによって迎接経費の全体像を明らかにする。また、経費の捻出に関する分析では、迎接役に対する藩主毛利重就の認識や萩藩の宝暦改革との関係を含めて検討する。

同第3章では、宝暦14年の下行（食料などの物資）の提供をめぐる萩藩と福岡藩の対立と交渉過程を検討する。特に、交渉をめぐる両藩の動向、迎接役に対する両藩の認識などの分析を通して、同年をもって江戸での聘礼が途絶した要因について考察し、両藩の対立を歴史的に位置付ける。

終章では、全体の論証を総括した上で、通信使の安全確保をめぐる対馬藩と迎接役の体制や役割、鷹と馬の贈呈の儀礼的な意義を論ずる。その上で、対馬藩と迎接役の負担の実態、負担に対する雨森芳洲の認識を踏まえ、本論文の結論を提示した。